

ゾンダーペハントルング
ユダヤ人移送（疎開）と特別処理
—ヴァンゼー会議から1942年末まで—

永 岑 三千輝

はじめに

総力戦・世界大戦段階のドイツに関するわが国での実証的研究は今なおきわめてわずかである¹。この段階の問題群とホロコーストの問題とは密接不可分な内的連関にあるが²、その研究もまだごくわずかしかない。

本稿はその課題意識のもとに、1942年1月20日のヴァンゼー会議を契機とするナチスのヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策への飛躍を若干の史料³を検討することで確認し、1942年がドイツ戦時経済にとっていかなる意味をもったかを、ホロコーストの進展状況と関連させて明らかにしておこうとするものである⁴。

1. 世界戦争・総力戦への転換とヴァンゼー会議

1941年6月22日、対ソ奇襲攻撃開始、広大な戦線での両軍合わせて1千万人近い兵士の現代的武器（戦車・飛行機等）を駆使した死闘の連続、8月から12月にかけてのこの独ソ戦での電撃戦の挫折・第三帝国最初の

¹ 戦時期ナチス経済の問題に関する最新の研究成果・柳澤治「ナチス経済体制とカルテル」『歴史と経済』第241号、2012は、その例外の一つであり、貴重な業績である。

² さしあたり、拙著『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001年、同『ホロコーストの力学—独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法—』青木書店、2003年を参照されたい。

³ 主要文書として本稿末尾に写真版を掲載するドキュメント（現在はドイツ連邦文書館 Bundesarchiv のヒムラー幕僚部文書 NS19 の中にある）は、早くは Poliakov, Leon/Wulf, Josef, *Das Dritte Reich und die Juden*, Berlin 1955 において紹介されているものである。この公刊ドキュメントとそれに先立つ完全版16ページの文書（未公刊）との関係、16ページの内容、この文書（6ページ半の簡略版）の成立事情と関連文書群、さらには背後の全体状況との関係の説明は、そこにはない。本稿はそうした点を明らかにしておこうとするものである。

⁴ ジェノサイドとしてのホロコーストの歴史的意味を把握するためには、世界史的比較研究が必要であることはいうまでもない。その点の新しい業績として、松村高夫・矢野久編『大量虐殺の社会史—戦慄の20世紀』（ミネルヴァ書房、2007年）、参照。しかし、言うまでもなく、比較の前提はジェノサイドの歴史社会的な具体的実相の正確な把握であり、本稿もまたそのような基礎作業の一つとなることを企図している。

深刻な「冬の危機」、総力戦への突入、そのうえさらに12月8日（現地時間7日）の日本の真珠湾攻撃、これに呼応するヒトラーの対米宣戦布告、アメリカ合衆国との戦争への突入、42年1月1日の26カ国連合国宣言により、ナチス・ドイツは年末から42年初め、戦争遂行のための飛躍的な総動員体制の構築を迫られることになった⁵。ナチ体制の諸国家機関は新たな、グローバルな文字通りの世界戦争への突入に対応するそれぞれの闘いの体制を作りださなければならなかった。

ドイツ国内はもちろん、ドイツに編入・併合した地域、ポーランドやソ連、バルカン半島をはじめとしてドイツが占領した広大なヨーロッパ地域、それら全域で治安平定の課題を担う親衛隊全国指導者・ドイツ警察長官ヒムラー、その直属のライヒ（国家ないし帝国）保安本部長官であり治安警察・親衛隊保安部長官でもあるハイドリヒと彼らのもとにある警察機構の戦闘的行動は、ますます容赦ないものとなった⁶。「ユダヤ人問題の最終解決」を議題とするライヒ保安本部をはじめとする主要国

⁵ 国防経済、軍需経済、その総力戦段階における問題群は、第一次大戦の経験から、経済学的に検討され、第二次大戦のドイツや日本でも高度な研究がなされた。その研究史に関して開拓的なものとして、柳澤治「再生産論と戦争経済の『隘路』—戦前・戦時日本の社会科学の認識—」金子光男編著『ウェスタン・インパクト—近代社会経済思想の比較史—』東京堂出版、2011年、参照。ホロコーストの問題はまさに戦争経済の「隘路」の発現以外の何物でもなく、隘路に対するナチスの解決方法、というものであった。その「隘路」が電撃戦から総力戦への転換、文字通りのグローバルな世界戦争への突入によって飛躍的に決定的に深刻化したことが、1942年のナチス体制とその支配下ヨーロッパの全体状況である。それがホロコーストの基礎にある根源的要因である。それはまたドイツの軍拡、それに動員可能な科学者など人的要因をも決定的に制約していた。拙稿「ホロコーストの力学と原爆開発」横井勝彦・小野塚知二編『軍拡と武器移転の世界史』日本経済評論社、2012年、参照。

⁶ ホロコーストの推進主体・実行主体はナチス期警察機構とその指導者（ヒトラー、ヒムラー、ハイドリヒ等々）である。警察の機能は社会的分業の各国地域の史的発達段階に応じて歴史的社会的に変遷をたどるが、その時々・地域ごとの警察の特殊性は警察が対峙している環境・警察を取り巻く全体状況とかかわってくる。ドイツ革命、ワイマール期の、特にその末期の激しい政治闘争、そのなかで登場し権力を掌握したナチ党国家、そしてその遂行する政策（世界強国の建設・周辺諸国の従属化・戦争）の場合の特殊性は、この全体的政策とそれを取り巻く国内外の諸勢力、とりわけ対抗諸勢力の特殊性と深く関連する動態的なものである。静態的な把握では生きた警察をとらえることはできないであろう。時代と状況の世界史的比較が必要であろう。その開拓的な比較研究が最近刊行された。監修・望田幸男・村岡健次、林田敏子・大日方純夫編著『近代ヨーロッパの探求13 警察』ミネルヴァ書房、2012年。第三帝国のライヒ保安本部の成立過程に関する先駆的業績として、芝健介「国家保安本部の成立」井上茂子・木畑和子・芝健介・永岑三千輝・矢野久『1939 第三帝国と第二次世界大戦』同文館、1989年、第1章、参照。

家官庁の次官クラスの会議、すなわちいわゆるヴァンゼー会議は、まさにそうした世界戦争への突入と全ヨーロッパの治安平定課題＝諸難問に直面した状況で、ハイドリヒが招集し、42年1月20日に開催された。

ヴァンゼー会議の議事録によれば、ドイツ占領下ポーランドの総督府次官ビューラーは、「最終解決」をまずは総督府から始めることを求めた⁷。総督府は、1939年9月からのポーランドにおける戦闘、諸都市の破壊、その後の占領統治、戦争の拡大に伴う総督府への人的物的要求の拡大、そうした厳しい状況下にあった。41年12月中旬の総督府閣議で、総督フランクは、総督府のユダヤ人問題を解決すること、彼によれば三百数十万人のユダヤ人を射殺するわけにはいかないので、何らか別の方法で総督府から排除することを求めていた。ビューラー次官は、その総督の結論を持って会議に臨んでいた。ビューラーは、総督府には、「約250万人の、労働不能な」ユダヤ人がいるとし、そのユダヤ人は「伝染病や闇商売」⁹の温床

⁷ Besprechungsprotokoll, S.15, in: Haus der Wannsee-Konferenz, Gedenk- und Bildungsstätte (Hrsg.), *Die Wannsee-Konferenz und der Völkermord an den europäischen Juden*, Berlin 2008 (Nachdr. der ersten Auflage), S.119.

⁸ 詳しくは、拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆 1941-1942』同文館、1994年、同『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001年を参照されたい。

⁹ 占領地における経済秩序の混乱は、戦時経済の悪化によるものであり、戦況と深くかかわるものであった。この経済秩序混乱から発生する不穏状態を防止することは、治安を担当する親衛隊・警察の主要関心事の一つであった。ヒムラーと親衛隊・警察機構は、問題の根底を解決するのではなく、問題の責任を反ユダヤ主義の回路で、すなわちユダヤ人に罪ありとして、排除していった。1943年1月のヒムラーの命令書によれば、ワルシャワのある娯楽施設では、「聞いたこともないような闇価格で、すべてのものがあつた。ドイツ人兵士もそこで普通になっている価格で食べ物や飲料を買って」いるとし、店が満杯状態のときに軍のパトロール隊と一緒に大々的な一斉手入れを行うよう命じている。Schreiben Himmlers an SS-Oberführer von Sammern-Frankeneegg vom 13. Jan. 1943, in: BA, NS 19/1740. ワルシャワ地区高級親衛隊・警察指導者 von Sammern-Frankeneegg からの返事は2月2日付。ヒムラーの命令書が届いた1月18日は、その前の3日間に実行した大量逮捕の後であった。その大量逮捕は「ポーランド人の住民に極度の不穏状態」を引き起こしていた。手入れに踏み込んでみると、店は「ほぼ空っぽ」であった。大量逮捕の際、この店も捜査したので、住民がこの店をもはや信用していかなかったからである。そこで、ポーランド人住民がまだ不穏状態にある状況でさらに手入れを行うと、「組織的抵抗が起きかねない」という。したがって、ヒムラーの命令ではあるが、目下は監視を続けるだけで、手入れは行わないほうがいいのではないかと。また、まだユダヤ人を雇っている全繊維加工経営の移転の準備は、フル回転で進行中、と。約2万人のユダヤ人労働者を雇う全部で8つの経営が、ルブリンの強制収容所内に移される予定である、とも。この「疎開」はグロボチュニクとの分業で実施される、と。Schreiben von Sammern-Frankeneeggs an Himmler vom 2. Feb. 1943, in: BA 19/1740. この現地親衛隊・警察指導者からの提案をヒムラーは了承した。Schreiben Brandts an Sammern-Frankeneegg vom 8. 2. 1943, in: Ibid.

となっている¹⁰として、「可及的速やかな」、「総督府から最終解決をはじめ」よう要望したのである。総督府は対ソ攻撃のドイツ軍の補給路すべてが通過するところであり、総督府の治安平定は対ソ攻撃遂行のために決定的に重要な課題であった。治安秩序を乱す¹¹根本的諸要因（独ソ戦から世界大戦への展開と総力戦）は不問の前提にして、責任をユダヤ人に「還元」して取り除くことはヒムラー、ハイドリヒの親衛隊・警察機構の緊急の任務となった。

この会議を一つの画期として、会議を主催したハイドリヒの指揮のも

¹⁰ 自民族・自国民のために「生きるに値しない人間」を、特にユダヤ人に還元するのは、人種主義的民族主義・排外的民族主義の思考回路である。衛生問題・人口問題に関して、川越修『社会国家の生成—20世紀社会とナチズム—』岩波書店、2004、参照。

¹¹ ヒムラーの見たところ、ヨーロッパの至るところで、「ユダヤ人は抵抗運動の分子であり、軍隊にとって最も危険な коммуニストの宣伝の張本人である」のであった。Schreiben Himmlers an Ribbentrop vom 29. 1. 1943. in: Bundesarchiv (以下BA) NS 19/1577. この書簡に先立ちドイツ外務省は、イタリア・ユダヤ人やポーランド将校の取り扱いに関する方針をヒムラーに伝えていた。それによれば、ドイツ外務省は、イタリア政府にユダヤ人対策でドイツに同調を求めて働きかけていた。当面、イタリア政府に譲歩して、「我々の権力領域に属する地域のイタリア国籍のユダヤ人が当該地域にとどまることを1943年3月31日まで認める」とした。しかし、「この時点以降は、軍事的政治的諸理由からすべてのユダヤ人に対し、したがって我々の権力下にあるイタリア国籍のユダヤ人に対しても、われわれがフリーハンドを持つ」と。Notiz vom 23. 1. 1943. Betr.: Juden fremder Staatsangehörigkeit, in: BA NS 19/1577. こうした方法で、イタリア政府がイタリア国籍のユダヤ人でドイツの処置から取り除きたい場合に、その可能性を与えようとするものであった。43年1月という時点はスターリングラード敗北がさまざまなルートを通じてヨーロッパに流れ出ていたときであり、反ドイツの諸傾向が各地で多様な形で噴出し始めたときである。その主犯をユダヤ人にもとめるのが、ヒトラーやヒムラー流の反ユダヤ主義である。反ユダヤ主義は、問題の本当の原因から目をそらす機能を持つが、ここでは第三帝国の総体的な敗退状況が抵抗運動・抵抗意識の根底にあることから目をそむけるための思考回路となっている。もろもろの敵の勢力の圧力が強まれば強まるほど、ユダヤ人に対する迫害は苛烈になる。こうした状況下でのユダヤ人殺戮に関する最近の史料紹介は、山本秀行「ナチ人種主義再考」『お茶の水史学』第54号(2011年3月)を、広くホロコーストに関する研究史の状況に関しては、木村靖二「ナチズム研究への長い道」『ドイツ研究』第45号、2011を、実証的な絶滅政策研究の主要業績としては、栗原優『ナチズムとユダヤ人絶滅政策—ホロコーストの起源と実態—』ミネルヴァ書房、1997年を参照されたい。絶滅命令・絶滅政策に関する栗原説(41年7月末—8月初旬説)に対する私のスタンス(41年12月説)は、拙著『ホロコーストの力学—独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法—』青木書店、2003年を、その前提となる独ソ戦・世界大戦とホロコーストの関係に関しては、脚注2の拙著二冊を参照されたい。二つの説の違いは単に半年の違いというだけではなく、ホロコースト展開にかかわる歴史構造全体・歴史のダイナミズム理解の方法と実証にかかわるものである。また、ホロコーストに関してはたくさんの側面からの研究があるが、その多方面へのめくばりという点で啓蒙的なものとして、芝健介『ホロコースト』中公新書、2008年も参照されたい。比較すべき問題群としてのイタリアにおける反ユダヤ主義、この問題におけるイタリアとドイツとの確執関係など、最新の研究動向は、石田憲「ファシストの戦争—世界史的文脈で読むエチオピア戦争」千倉書房、2011年、参照。

永岑 ユダヤ人移住（疎開）^{ゾンダーヘンドルング}と特別処理—ヴァンゼー会議から1942年末まで—

と、ユダヤ人の「疎開」と称するポーランド東部の絶滅収容所への移送が急速に行われた。絶滅収容所もベウゼッツにつづき、ソビボール、トレ布林カに相次いで建設された。トレ布林カやベウゼッツ、ソビボール（ルブリン近郊）などへのユダヤ人「疎開」は、鉄道によって行われた。帝国交通省次官・ドイツ帝国鉄道総裁代理ガンツェンミュラーの親衛隊幹部に対する1942年7月28日の書簡には、クラカウの東部鉄道総局（Generaldirektion der Ostbahnen/Gedob）からの通報が抜粋されている。それによれば、「7月22日以降、毎日、一列車、それぞれ5000人のユダヤ人を乗せて、ワルシャワからマルキニア経由でトレ布林カに、その他、週2回、一列車5000人がPrzemyslからベウゼッツに向けて、運行している。Gedobはクラカウの保安部と恒常的に連絡を取り合っている。保安部は、ワルシャワからルブリン経由でソビボールへの輸送が、この路線の修繕作業（1942年10月）が輸送を不可能すれば、停止するということを了承している」¹²と。

このガンツェンミュラーの知らせに対して、ヒムラーの名前で幕僚が感謝状を送った。「特にうれしいのは、すでに14日も、毎日、選び出された民族のメンバー5000人を乗せた一列車がトレ布林カに向かっていることであり、我々がこうしたやり方でこの民族移動を加速したテンポで実行できる状態になったことです」¹³と。

さらには、アウシュヴィッツの郊外ビルケナウの巨大な収容所の中に、ガス室と死体焼却を行う火葬場（クレマトリウム）も、建設が開始される。ホロコーストで最も有名なこのアウシュヴィッツ—ビルケナウの火葬場は翌43年になって完成し、稼働することになる。本稿が対象とする42年の段階は建設途中であった。最も集中的にガス室（一酸化炭素）によるユダヤ人殺害が行われた42年の一年間においては、アウシュヴィッ

¹² Schreiben Ganzenmüllers an den SS-Obergruppenführer Wolf vom 28. Juli 1942, in: Bundesarchiv (以下BAと略) NS 19/2655. 42年10月までは、移送が規則的の実施される、ということである。

¹³ Schreiben an Ganzenmüller vom 13. August 1942, in: BA, NS 19/2655.

ツービルケナウが使われたのではなかった。

ハイドリヒがチェコの抵抗組織によってロンドンから運ばれボヘミアの森にパラシュートで放たれた暗殺班に襲撃され、約一週間後に死亡したのは42年6月はじめであった。しかし、その後はヒムラー自らが、報復の熱情に駆られながら、また、42年夏からの対ソ攻撃の後方地域・占領地の治安平定の任務に駆りたてられながら、「ラインハルト作戦」と称する「ユダヤ人問題最終解決」の作戦、疎開＝絶滅収容所での殺害作戦の先頭に立った。彼は、42年末までに軍需関係などの労働配置で絶対必要な最低限のユダヤ人を除き、それ以外のユダヤ人の「疎開」完遂を命じた。

しかし、その42年12月までに、第三帝国の軍事情勢は大きく変化し、敗退への諸要因がさらに累積していた。スターリングラード攻防戦での窮状、前線への輸送の絶対的必要性は、ユダヤ人「疎開」の輸送を不可能にするにいたった。高級親衛隊・警察指導者・オストの警察大将クリューガーのヒムラーあて秘密電報によれば、「1942年12月15日から43年1月15日までの輸送禁止により、ユダヤ人移住のあらゆる輸送可能性が奪われ、この措置によりユダヤ人移住の全計画が極めて脅かされている」¹⁴と。

スターリングラード攻防戦は最終段階に近づき、スターリングラード市内を占領したドイツ国防軍の第六軍が、ソ連軍によって大きく逆包围され、敗北の地獄へと追い立てられる状況になりつつあった。生命線の危機、すなわち、東部前線への輸送こそが極めて緊迫した状態となっていたことが、ここに示されている。国防軍の絶対的に必要な物資輸送でさえ、「不可能」といわれるような状況に陥っていた。「国防軍最高司令部の中央当局と帝国鉄道省との折衝により合意ができたのは、少なくとも3本の列車を緊急の任務のために用立てる」ということに過ぎなかった。ユダヤ人「疎開」の列車だけが足りなくなったのではない。「国防軍各部署が申請した繊維製品・衣類等のすべての供給のためのあらゆる

¹⁴ Fernschreiben Krügers an Himmler vom 5. 12. 42, 1500, in: BA, NS 19/2655.

輸送運動も、同様に不可能になった」¹⁵という窮迫状況であった。

そのような状況で、ヒムラーは43年初め、自分の「疎開」完遂命令が、目標とした42年12月末までに達成されたのかどうか、どこまで達成されたのか、当然にも重大な関心を抱かざるを得なかった。そこで彼は43年初めに、その統計をまとめさせた。以下では、この統計報告とそれを巡る若干の史料を紹介しつつ検討して、ナチス・ドイツにとって、ホロコーストにとって、ユダヤ人の運命にとって、1942年がどういう年だったのかを確認しておこう。

2. 1942年末の「最終解決」の到達点は何か —統計専門家の任命—

1943年1月18日、ヒムラーは、統計専門家コーヘア（職名はヒムラー直属統計査閲官 *Inspekteur für Statistik*）に「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決に関する統計の作成」を命じた。彼はコーヘア宛ての任命文書で、「あなたにこの統計のために必要な、そしてあなたの望むすべての資料」をライヒ保安本部に提供させるとした。そして、統計作成作業は統計査閲官コーヘアに一本化し、ライヒ保安本部自身には「統計作業をさせない」とした¹⁶。

同じ日付で、ヒムラーはライヒ保安本部長官¹⁷宛に書簡を書いた。統計査閲官に「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決のための統計作成を命じた」ことを知らせ、ライヒ保安本部自身には今後統計作業をさせないことも伝えた。なぜなら、「これまでの統計資料には専門的な正確さが欠如しているから」であった¹⁸。

¹⁵ Fernschreiben Krügers an Himmler vom 5. 12. 42, 1500, in: BA, NS 19/2655.

¹⁶ Schreiben Himmlers an den Inspekteur für Statistik am 18. 1. 1943, in: BA, NS 19/1577.

¹⁷ 1942年6月にハイドリヒが死去した後、ヒムラーがライヒ保安本部を直接指揮したが、年末にはカルテンブルンナーを新長官に任命していた。

¹⁸ Schreiben Himmlers an den Chef des Reichssicherheitshauptamtes am 18. 1. 1943. Betr.: Tätigkeits- und Lagebericht 1942 über die Endlösung der europäischen Judenfrage, in: BA, NS19/1577.

3. 「ユダヤ人根絶加速化」の外国報道とヒトラー命令による実態の隠ぺい操作

1942年にヒムラーが指揮するラインハルト作戦でユダヤ人「疎開」(絶滅収容所におけるユダヤ人ガス殺)が急ピッチで進められたが、その情報が外部に漏れ出ることを完璧に阻止することはできなかった。「占領下ヨーロッパのユダヤ人根絶の加速化に関する新聞報道」がヒムラーに伝えられ、彼の幕僚部から治安警察・保安部長官にも伝えられていた¹⁹。

ユダヤ人殺害の実態に関して外部に漏れる情報量がどの程度であり、またその正確さがどの程度であったのか不明だが、43年7月11日付の総統大本営発、ナチ党官房長ボルマンの党全国指導者、^{ライヒスライター}大管区指導者など党と付属団体の指導者に出した回状43年第33号「ユダヤ人問題の取り扱いに関して」は、実態が相当にうわさとなって流れ出ていたこと、それがナチ当局にとっては不都合だったこと、隠ぺいの必要を感じたことを示している。

この回状においてボルマンは言う。「総統の指示により、以下のことを伝える。ユダヤ人問題の公的な取り扱いの際には、将来の全体的解決に関するいかなる言及も行ってはならない。しかしながら、ユダヤ人はひとまとめにして目的にふさわしい労働配置に引き渡されるということは語ってもいい」と²⁰。この回状は、全高級親衛隊・警察指導者、親衛隊の全局長宛にも周知徹底された²¹。「疎開」は「労働配置のため」

¹⁹ Schreiben an den Chef der Sicherheitspolizei und des SD vom 22. 2. 43, in: BA NS 19/1577.

²⁰ Rundschreiben Bormanns Nr. 33/43 g am 11. 7. 43. Betr.: Behandlung der Judenfrage, in: BA NS 19/1577.

²¹ Schreiben an alle Höheren SS- und Polizeiführer, an alle Hauptamtchefs, vom 21. 7. 43, in: BA NS 19/1577. 配布対象者・親衛隊警察高級指導者のリストには、1.Nordost, 2.Ostsee, 3.Spree, 4.Elbe, 5.Südwest, 6.West, 7. Süd, 8.Main, 9.Südost, 10.Fulda-Werra, 11.Nordsee, 12.Mitte, 13.Rhein-Westmark, 14.Donau, 15.Alpenland, 16.Weichsel, 17.Warthe, 18.beim Reichsprotector in Böhmen und Mähren, 19. Ost, 20.Nord, 21.Nordwest, 22.Ostland, 23.Rußland-Mitte, 24.Ukraine, 25.Serbien, 26. Frankreich, 27.SS-Brigadeführer Jungelausとなっている。当然のことながら、バルト三国と白ロシアをまとめたオストラント、ロシア中部、ウクライナ、セルビア、フランスといった占領地の高級親衛隊・警察指導者にも配布されている。局

永岑 ユダヤ人移住（疎開）^{ゾンダーバンドルング}と特別処理—ヴァンゼー会議から1942年末まで—

といえ、そうすれば戦時下、労働力不足の状況下ではごく自然なことであり、その実態が隠ぺいできるということになる。

ヒトラーはかつて有名な1939年1月30日の国会演説で、今度、「再びユダヤ人が世界戦争を引き起こしたら」、第一次大戦の帰結（彼によれば、「ボルシェヴィズムの勝利」）ではなく、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅だ、と「予言」した。その予言は折に触れてゲッベルスなどにより公言された。ヒトラーは、1942年1月30日の国会演説でも、ヨーロッパからユダヤ人を追放するという脅迫を公言していた。だが、それから一年半ほど、1943年の夏には、すなわち、実際のヨーロッパ・ユダヤ人絶滅政策が進行し、その情報が漏れ出て世界的に問題化され始めると、「労働配置に投入しているだけ」と言わせることになったのである。

4. 統計査閲官コーヘアの報告

ヒムラーの命令（1943年1月18日）を受けたコーヘアは、約2ヶ月後の3月23日に、「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決」についての統計的な「第一次の暫定の報告書」（全文16ページ）を提出した（後掲の史料①はその9-10ページ）。そして、「最終的な非難の余地のない」報告書のためには、「さしあたりはまだ数字的に矛盾する資料」の慎重な検討が必要であるとし、個別的にどのような点を修正して完成版にすればいいか、ヒムラーに指示を仰いでいる²²。ヒムラーは基本的にはその報告内容を治安警察・保安部長官あての書簡（4月9日付）でほめてい

長にも関係者リストをみておくと、Hauptamtには次のようなものがあった。1) SS-Hauptamt, 2) Reichssicherheitshauptamt, 3) Rasse- und Siedlungshauptamt-SS, 4) Hauptamt Ordnungspolizei, 5) SS-Wirtschafts-Verwaltungshauptamt, 6) Persönlicher Stab RFSS, 7) SS-Personalhauptamt, 8) Hauptamt SS-Gericht, 9) SS-Führungshauptamt, 10) Dienststelle SS-Obergruppenführer Heißmezer, 11) Reichskommissar für die Festigung deutschen Volkstums, Stabshauptamt, 12) Reichskommissar für die Festigung deutschen Volkstums, Hauptamt Volksdeutsche Mittelstelle, 13) Reichsarzt-SS, 14) Chef Fernmeldewesen beim RFSS, 15) Inspekteur für Statistik beim RFSS.

²² Schreiben Korherrns an Brandt, Pers. Stab Reichsführer-SS, am 23. 3. 1943, in: BA, 19/1570.

る。「後々、場合によってはありうることの資料として、特に隠ぺい目的のために、非常によくできていると思う」とし、公刊も他の人に渡すことも禁じている。そして、最も重要なことは、今まさにユダヤ人が東方へ送られるということであり、「このことはそもそも人間的にありうることである」と。東方へのユダヤ人の移送ということなら、誰も疑問に思わない、人間的にありうることだ、ということをおそらく強調していることが、背後にある真実、すなわち、人間としてあり得ないこと、人間的には考えられないことを遂行しているということをおさらけ出している。したがって、この書簡は3部のみ作成され、国家機密の標しが付されている。幕僚部のものは第3のナンバリングのものである。治安警察の報告では毎月どれだけ移送されたかということと残っているユダヤ人はその時ごとにいくらかということだけを知らせるように、と²³。

ヒムラーが問題にしたのは、秘密を露呈する危険のある言葉づかいであった。43年4月10日、ヒムラーからコーヘアに指示が届けられた。それには全体に対する細かな指示はなかった。したがって、基本的には統計総括を認めたことを作成者コーヘアにも示していた。しかし、決定的に重要な表現、秘密を暴露する用語については厳しく訂正を命じている。すなわち、ヒムラーは、いかなる個所でも、「ユダヤ人の特別処理（“Sonderbehandlung der Juden”）」という表現を使ってはならない、と命じた。彼は問題の個所を具体的に示したが、それは報告書草案・全文16ページの9ページの第4の項目のところであった。原案の「ユダヤ人の特別処理」は削除し、次のようにすべしとされた。「“東部諸州からロシア東部へのユダヤ人の輸送（Transportierung）。これは、総督府の情勢により・・・何人、ヴェルテガウの情勢により・・・何人、誘導されたものである”のように表現すべし」と。そして、「この他の表現は使ってはならない」と²⁴。まさに、人間集団の「輸送」であれば、戦時期

²³ Schreiben Himmlers an den Chef der Sicherheitspolizei und des SD, in: BA, NS 19/1570.

²⁴ Schreiben Brandts an Korherr vom 10. 4. 1943, in: BA, 19/1570.

に世界各国・各時期にみられることとして、内外の批判や疑念を避けるもの、そして絶滅収容所へ送り込むという真実のこと、秘密にすべきことを隠ぺいできるものとしているわけである。実際に、最終版の9ページの当該箇所4. では後でみるように、厳命どおりに書かれている²⁵。(後掲の史料①を参照されたい。)

報告書全文のタイトルは、「ヨーロッパ・ユダヤ人問題の最終解決—統計報告—」である。目次は、「I. 前置き、II. ドイツのユダヤ人統計の決算、III. ユダヤ人の民族的弱体性、IV. ドイツからのユダヤ人の外国への移住(Auswanderung)、V. ユダヤ人の疎開(Evakuierung)、VI. 諸ゲットーの中のユダヤ人、VII. 強制収容所の中のユダヤ人、VIII. 刑執行施設のなかのユダヤ人、IX. ユダヤ人の労働配置、X. ヨーロッパ・ユダヤ人統計の決算」となっている。

「I. 前置き」では、「ユダヤ人の本質とその歴史、千年におよぶ不断の流転のため」、資料やその発生の知識なしには誤った結論に導かれるとしている。ユダヤ人のマジョリティへの同化の努力や「主人民族」との混血、気付かれないように把握を免れようとするユダヤ人の努力、間違った統計ないし間違っって解釈された統計などが原因である、と²⁶。

統計は、一つには統計上の応急措置のために、一つには信仰上のユダヤ人と人種上のユダヤ人との広範な不一致のために、また、人種思想の無知のために、あるいはその時々²⁷の宗教的思考にとらわれているために、人種に従って把握されることがなく、信教告白に従って把握されてきたとする。たとえばドイツの1933年の統計では、信仰ユダヤ人が502,799人であるのに、人種上のユダヤ人（完全ユダヤ人、二分の一ユダヤ人、四分の一ユダヤ人）は合計85万人に上るとされる。オーストリアでは1934年に、信仰ユダヤ人が191,481人であるのに対して、人種上のユダヤ人は30万人から40万人にもなる、と²⁷。統計専門家による報告は、錯

²⁵ Die Endlösung der europäischen Judenfrage. Statistischer Bericht, S.9, in: BA, NS 19/1570.

²⁶ Ibid., S.1.

²⁷ Ibid., S.2.

綜した統計事情を考慮して整理したもの（慎重に、誤りもあるうるとの限定付きで）が、全文16ページのユダヤ人の増減に関する総決算である。

「Ⅱ. ドイツのユダヤ人統計の決算」では、1. 旧ライヒ（ズデーテン、ダンツィヒを含む）のユダヤ人統計の決算、2. オストマルクのユダヤ人統計の決算、3. プロテクトラート・ベーメン・メーレンのユダヤ人統計の決算、に分けられている。

その1. 旧ライヒ（ヴェルサイユ条約下のドイツ領土）をみると、ナチスの政権掌握の33年1月30日から43年1月1日までに、①新生児増を差し引いた死亡超過数が61,193人、②外国への移住が352,534人、③移住（疎開）が100,516、合わせると514,243人の減少となる。これに対し、ズデーテン併合による増加が2,649人、その他の諸条件により同じ期間に増加したのが1,921人、合計で4,570人となる。そして、43年1月1日時点でなお残っているのが、51,327人と。

オストマルク（1938年3月「編入」のオーストリア）の場合、同様に、①死亡超過14,509人、②外国移住149,124人、③移住（疎開）47,555人、④その他の原因によるもの710人、合計211,898人の減少となる。その結果、43年1月1日現在は、8,102人、と。

プロテクトラート・ベーメン・メーレンの場合、①死亡超過7,074、②外国移住26,009、③移住（疎開）69,677、合計で102,760人の減少となる。その結果、プロテクトラートの43年1月1日現在は、15,550人、と²⁸。

「Ⅲ. ユダヤ人の民族的弱体性」は、新生児の数と死亡者数を比較したものであり、死亡者数が大幅に新生児数を超過しており、旧ライヒに関しては毎年の統計が掲げられている。それによれば、1933年から42年までに、新生児15,221に対し、死者の数は76,914人である。死亡超過数が61,693人、と。このように死亡超過が多いことが「ユダヤ人の民族的弱体性」と解釈され表現されている²⁹。ドイツでさまざまな迫害を受け、

²⁸ Ibid., S.4.

²⁹ Ibid., S.5f.

逃げ出せるもの（外国移住者）が逃げ出した後の状況、食料・住宅事情その他が悪化していることを考えれば、ヒトラー・ナチ政権の差別・迫害・抑圧こそが死亡者超過の主要な原因であると考えられるが、ここでも、人種主義的反ユダヤ主義の思考回路から、悪いことはユダヤ人の責任、とされているわけである。

「IV. ユダヤ人の外国移住」では、前述の旧ライヒ、オストマルク（オーストリア）、プロテクトラートについて、それぞれの②の数が再掲されている。そして、旧ライヒからの外国移住者については、移住先ごとに、たとえばアメリカ合衆国に57,000、南アメリカに54,000、中部アメリカに10,000、パレスチナに53,000、アフリカ（とくに南アフリカ）に15,000、アジア（中国）に16,000、オーストラリアに4,000、といった明細が挙げられている。ヨーロッパ内の諸国に移住した数は144,000で、そのうち32,000人以上がイギリスへ、39,000人がポーランドないし総督府へ、18,000がフランスへ、8,000がイタリアへ、7,500がオランダへ、そして6,000がベルギーへ向かったとしている。これらヨーロッパ近隣諸国への移住ユダヤ人の大部分は、さらに「海外へ」移住すると想定されている。オストマルク（オーストリア）からの外国移住者も、ヨーロッパ諸国65,500、アメリカ50,000、アジア20,000、パレスチナ9,000、アフリカ2,600、オーストリア2,000と、詳しい数字が示されている³⁰。

ホロコーストの展開との関係で問題となるのは、そして、ヒムラーが文書表現上の隠ぺい工作をしたのは、先に言及したように、「V. ユダヤ人の疎開」の節³¹である。ただし、ヒムラー幕僚部文書（NS 19/1570）の報告書をみると、4. の個所では訂正が行われているが、5. の項目の最後に置かれた疎開総数を提示する個所、すなわち、オリジナル原稿の10ページでは、ガス室での殺害を意味する「特別処理」の表現がそのままだま残ってしまっている（後掲の史料①を参照されたい）³²。隠そう

³⁰ Ibid., S.8.

³¹ Ibid., S.9f.

³² Ibid., S.10.

としたがその隠ぺい作業は完璧ではなかった証拠が厳然として存在する。

「ユダヤ人の疎開」は、少なくともライヒの領域で、「ユダヤ人の外国移住 (die Auswanderung der Juden)」と入れ替わったとする。1941年秋からのユダヤ人外国移住の禁止以降、大規模にその準備が進められ、1942年に全ライヒ領域で広範に遂行された、と。「ユダヤ民族のバランス」(すなわち増減対照統計)では、疎開 (Evakuierung) は「移住 (Abwanderung)」として登場する、と³³。

ライヒ保安本部の集計によれば、ユダヤ人の移住 (疎開) は、1943年1月1日までに、ズデーテンラントを含む旧ライヒ (領土膨張以前のドイツ領土) から、100,516人、オストマルク (オーストリア) から47,555人、プロテクトラートから69,677人、合計で、217,748人であった。この数字の中には、テレージエンシュタットの老人用ゲッターに疎開させられたユダヤ人も含まれていた³⁴。

「疎開全体の数」はどうであったか。これが地域ごとに分けられて、次に示されている。全体とは、東部地域 (ポーランド共和国領土だった地域から切り裂いてライヒに併合ないし「編入」した地域) を含むライヒ領域、さらに、1939年10月から1942年12月31日までのヨーロッパにおけるドイツの権力・勢力圏のことであった。これら全域からの疎開の統計が取り上げられている。下記の4. が「特別処理」に代えて使われた「輸送」の表現が出てくる個所である。

1. バーデン・プファルツからフランスへのユダヤ人疎開……………6,404人
2. ライヒ領域 (プロテクトラートとピアウリストク地域を含む) から
東部への (下線強調はオリジナルのママ) ユダヤ人疎開
……………170,642人

³³ Ibid., S.9.

³⁴ Ibid.

永岑 ユダヤ人移住（疎開）と特別処理^{ゾンダーベンドルング}—ヴァンゼー会議から1942年末まで—

3. ライヒ領域とプロテクトラートから
テレージエンシュタットへの（下線ママ）ユダヤ人疎開 …87,193人
4. 東部諸州から
ロシアの東部へのユダヤ人の輸送（Transportierung） …1,449,692人
その内、 総督府の収容所から送られた者 ……1,274,166人
ヴァルテガウの収容所から送られた者 ……145,301人
5. その他の諸国からのユダヤ人疎開、すなわち、
フランス（1942年11月10日以前に占領されていた限りでの）
……………41,911人
オランダ ……38,571人
ベルギー ……16,886人
ノルウェー ……532人
———以上が報告書9 ページ、以下が10ページ———
スロヴァキア ……56,691人
クロアチア ……4,927人

疎開総数

テレージエンシュタットを含め、特別処理^{ゾンダーベンドルング}を含めて ……1,873,549人
テレージエンシュタットを除くと ……1,786,356人

6. さらに、ライヒ保安本部の報告によれば、東方戦役開始以降、
バルト諸国を含むロシア地域でのユダヤ人疎開 ……633,300人

以上の数字にはゲッターと強制収容所の囚人は含まれていない。
スロヴァキアとクロアチアからの疎開は、これら国家自身により
実行された。

以上のように、疎開の全体像が把握されている。
しかし、先にも触れておいたが、ヒムラーによって「いかなる個所で

も」使ってはならないとされた「特別処理」という言葉が、総括的に疎開総数を説明する10ページの個所ではいま見たように残ってしまっている。絶滅収容所への移送を、したがってガスによる大量殺害を暴露する危険があるとして使用を禁じられた言葉が、ここには明示されている。ヒムラーの厳命は守られていない。作成した統計専門家も、幕僚部の責任者も、入念なチェックはしなかったということか。ヒムラーも自分の訂正命令の執行状況をチェックしなかったということか。ヒムラーを取り巻く治安情勢の多難さと多忙さから考えて、また、部下が忠実だと信じて、厳密に訂正されているかどうか確認する余裕がなかったとみるべきか。連邦文書館所蔵のこの文書は、ヒムラーの4月10日の書簡を受けた修正ヴァージョンとして、4月28日付で統計専門家コーヘアから幕僚部(のスタッフ気付けで)に届けられたものである³⁵。

ともあれ、「東方への移住」という漠然とした表現は、「絶滅収容所への移送」の隠ぺい語であるが³⁶、それ以上に実態からすれば非現実的な表現が「ロシアの東部への移住」である。その言い回しが、使われている。43年初めの戦況からして全くありえないことが、隠ぺいのためには好都合だと考えられ使用されたということであろう。そこまで注意しながら、肝心の「特別処理」を一か所、削除し忘れているのである。

さらに付言すれば、6. のバルト三国を含むロシア地域の63万人余の「疎開」は、まさに、ライヒ保安本部の特別出動部隊であるアインザッツグルッペ³⁷によるものであり、42年1月までに北方軍集団の後方で作戦行動するAの部隊だけで20万余を処刑していたが、4つの部隊で42年末までに63万人余を処刑＝射殺したとの報告とみなければならない³⁸。

³⁵ Schreiben Korherrn an den Persönlichen Stab RF-SS, z.Hd. SS-H' stuf. Meine vom 28. 4. 1943. Betr.: Abänderung des Berichtes über „Die Endlösung der europäischen Judenfrage“, in: BA, NS 19/1570.

³⁶ Theresa Wobbe (Hrsg.), *Nach Osten: verdeckte Spuren nationalsozialistischer Verbrechen*, Frankfurt am Main, 1992.

³⁷ 治安警察・保安部と武装親衛隊などで構成する特別部隊でA、B、C、Dの4部隊あり、それぞれ1,000人規模であり、北方軍集団、中央軍集団など正規軍の後方地域の治安平定のために機動的に作戦を展開し、ユダヤ人を町や村から集めて射殺して行った。

³⁸ ウクライナユダヤ人の絶滅に関しては、野村真理『ガリツィアのユダヤ人—ポーランド人とウクライナ人のほごまで—』人文書院 2008、参照。

「Ⅵ. 諸ゲットーの中のユダヤ人」は、各地のゲットーの統計をまとめている。

まず第一に、テレージエンシュタットの老人ゲットーの状況が示されているが、ここには87,193人が移送された。そのうち、ライヒ領域から47,471人（オストマルク14,222人）、プロテクトラートから39,722人であった。これが1943年初めにどうなっていたかということ、総数は49,392人であり、そのうちドイツ国籍の者が24,313人、プロテクトラート所属の者が25,079人であった。「この減少は特に死亡による」と。テレージエンシュタットの他にもライヒ領域でたくさんのユダヤ人老人ホームや老人施療院があるが、ゲットーとか疎開先とはみなせないような小規模のものであった³⁹。

次に、下線で強調されているリッツマンシュタット（ウッチまたはウッジ）のゲットーであるが、ここには1943年初め、87,180人のユダヤ人がいた。そのうち、83,133人がポーランド国籍であった。

第三に、総督府（下線、オリジナルのママ）の、圧倒的にその他のゲットーに入れられているユダヤ人の数は、1942年12月31日現在、次のようになっていた、ないしそう推定されていた。すなわち、クラカウ地区37,000人、ラドム地区29,400人、ルブリン地区20,000人（推定）、ワルシャワ50,000人、レンベルク161,514人、と。総督府の諸ゲットーの合計で、297,914人、と。

「Ⅶ. 強制収容所の中のユダヤ人」では、「権力掌握から」1942年12月31日までに73,417人がそこに入れられたとする。そのうち、36,943人が釈放され、27,347人が死亡によりいなくなった。42年12月31日現在の残存数は、9,127人、と⁴⁰。

「Ⅷ. 刑執行施設のなかのユダヤ人」は、1943年初めの時点でライヒ

³⁹ Die Endlösung der europäischen Judenfrage. Statistischer Bericht, S.10.

⁴⁰ Ibid., S.11f. 「疎開作戦の過程でアウシュヴィッツとルブリンの強制収容所に入れられたユダヤ人」は、ここに含まれていないとされる。ルブリン、アウシュヴィッツ、ブーヘンヴァルト、ラーフェンスブリュック、ダッハウなど収容所ごとの入所者数、釈放数、死亡者数、そしてS.12に、42年12月31日現在の人数が統計で示されているが、省略。

領域の刑執行施設に捕えられて居る数を458人としている。

「IX. ユダヤ人の労働配置」は、1943年初めの時点で、ライヒ領域で185,776人であった。

そのうち、主な配置先をみると、治安警察・保安部管轄下（ただしポーゼンとソヴィエトロシアのユダヤ人は含めず）に、21,659人、そのうち18,546人がドイツ国籍、107人がプロテクトラート所属、2,519人が無国籍、487人が外国籍であった。

報告書には、都市毎の労働配置数の明細が掲載されているが省略し、一番多いベルリンの数だけをみると、15,100人であった。

ケーニヒスベルク管区には、治安警察・保安部管轄下の96人の他、18,435人がいたが、そのほとんどはソヴィエト・ユダヤ人であった。ポーゼン管区にはゲッターと収容所に配置されているのが95,112人で、そのほとんどがポーランド・ユダヤ人であった⁴¹。

最後に、「X. ヨーロッパ・ユダヤ人統計の決算」である。

出発点としてヨーロッパ各国の1925年から35年の時点のユダヤ人数の統計、それから統計でつかみうる最近の（旧ライヒ、オーストリア、チェコスロヴァキア・プロテクトラートについては1943年の、それ以外のほとんどは1937年の）統計を掲げている。そして、ヨーロッパには、1937年の地球上のユダヤ人総数・約1700万人のうち、約1000万人以上がいたとする。そのヨーロッパ・ユダヤ人のうち、特にドイツが占領する以前のポーランドとロシアの領域（バルト海から黒海・アゾフ海の間地域）に最も多くのユダヤ人が「住んでおり、ないしは住んでいた」。その他、中欧・西欧の商業中心地やライン地方、それに地中海の海岸部に住んでいた、と⁴²。

そして、1937年から1943年の間に、ヨーロッパのユダヤ人が外国移住（Auswanderung）によって、部分的には中欧・西欧におけるユダヤ人の

⁴¹ Ibid., S.13.

⁴² Ibid., S.14f.

死亡超過によって、部分的には疎開によって、「とくにユダヤ人密度の高い東部地域における疎開によって」、400万人減少したと算定できるとしている。報告書末尾で、結論的に下線を付して、「総じて、ヨーロッパ・ユダヤ人は1933年以降、したがって国民社会主義のドイツ権力掌握の最初の10年間に、その総数の半分近くを失った、と強調している⁴³。

ヒムラーは、4月9日付で、治安警察・保安部長官宛てに、ユダヤ人問題の最終解決についての統計査閲官の報告書を受け取った旨、伝えた。そして、さきにもふれたように、この報告を後々のための資料として、「とりわけ隠ぺいのために非常によくできている」と褒めた。そして、自分にとって最も重要なことは、ユダヤ人を「東方へ運び去ること」であり、このことは「人間的に可能なことだ」と。そして、今後、毎月、ユダヤ人の「東方への移送」が行われたか、そしてその時点でどれだけのユダヤ人が残っているかを報告するように命じている⁴⁴。

そして、この間に、ヒムラーは、彼がほめた報告書をヒトラーに見せることを思い立ったようである。

5. ヒトラーに提出した簡略版報告書

全文16ページの詳細な統計報告書を見たヒムラーは、43年4月1日に、治安警察・保安部長官に対して「総統に明確な増減対照表を見せるため」、簡略版の作成を命じた。これを受けてコーヘアが6ページ半の圧縮版を作成し、4月19日付で、ヒムラーのもとに届けた⁴⁵。ヒトラーが確認した「最終解決」のこの時点までの到達点の確認は、この簡略版によるということになる。そのヒトラーに提出された簡略版は、本稿の付録として末尾にオリジナルの写真コピー版（史料②）を掲載することと

⁴³ Ibid., S.16.

⁴⁴ Schreiben an den Chef der Sicherheitspolizei und des SD vom 9. 4. 1943, in: BA, NS 19/1570.

⁴⁵ Schreiben Korherrns an Brandt vom 19. 4. 1943, in: BA, NS 19/1570.

し、若干の注意点だけを見ておこう。

2 ページでは、地域ごとに、ナチスが権力掌握時点⁴⁶と1942年12月31日の時点をとって、ユダヤ人の減少を明確に示すようにしている。総括的に、この間に、3,719,000人が606,103人へと、310万人も激減していることを示す。

3 ページの統計では、平時でどれだけユダヤ人が減ったかを明確化している。すなわち、それは総数で3,120,892人になっている。戦争開始までに「文明化し、不妊化した」ユダヤ人の半数が、特に海外移住によって減少した点を強調している。そのことは逆に、「東部の、将来にとって危険な、多産のユダヤ人大衆がもっぱら戦時中に」、そして「とくに1942年の疎開措置以降に」明確に減少したこと（減少させたこと）を強調することになっている。特に総督府（Generalgouv.）は、この間に約200万人から297,914人に、すなわち170万人ほど激減している。

4 ページは総括表である。ユダヤ人が「疎開（Evakuierung）」措置によって、170万人も減少していることが明示されている。

5 ページには、キリスト教徒と結婚したユダヤ人の数が特に取り上げられている。純然たるユダヤ人と混合婚では、今後の「疎開」における取扱が違うためであろう。1942年12月31日にまだ旧ライヒ、オストマルク、ベーメン・メーレンに残っていた総数74,979人のうち、混合婚のものが27,774人であり、それ以外は47,205人であった。この純然たるユダヤ人が「疎開」順位で先に来るということになろう。42年12月31日時点の旧ライヒの51,327人のうち、3ヶ月後の4月1日には、残るは31,910人となっているという。この残りのユダヤ人のうち、混合婚は16,668人（したがって92人しか減っていない）、そのうち、特権

⁴⁶ 旧ライヒは、ヴェルサイユ体制下・ワイマル共和国期の領域であり、ヒトラー政権誕生の33年1月30日を基準にしている。ズデーテンラントは、チェコスロヴァキアからズデーテンラントを割譲させた時点、すなわち1938年9月29日を基準としている。ベーメン・メーレンは、チェコスロヴァキア共和国を解体し、プロテクトラートを創設した時点を基準にしている。東部地域（ビャウイストクを含む、その時点は1940年6月）と総督府（レンペルクは1940年6月）は、1939年9月、すなわちポーランド攻撃開始時点を基準にしている。

永岑 ユダヤ人移住（疎開）と特別処理—ヴァンゼー会議から1942年末まで—
ゾンダーヘンドルング

を持っているのが12,117人、4,551人は特権を持たない混合婚の者だと。すなわち、3ヶ月間に疎開より激減したのが、純ユダヤ人ということになる。

7ページ下線部の強調は、16ページの報告書全文の結論部と同じ強調箇所である。

6. 報告書作成当時の治安状態とゲットー解体・撤去

ワルシャワに8カ月滞在したドイツ人の体験記録（親衛隊員が提出したもの）によれば、「1942年12月以降、すなわち、東部戦線での最初の後退の後」、ワルシャワでは不穏状態が大きくなり、毎日、国防軍兵士や民政当局の職員家族に対する襲撃（射殺）事件が発生した。諸官庁に対し郵便小包の時限爆弾や無数の脅迫状が送り付けられ、銀行や国営印刷所が襲撃された。国営印刷所では二人だけしかいないドイツ人（所長・副所長）が射殺（3月3日、守衛の武装解除後）された。所長は3人の男によって誘い出された。一人は政治指導者のユニフォーム、二人目は親衛隊保安部のユニフォーム、三人目は民間人の服装を身につけていた。非常に流暢なドイツ語を喋った。金庫のカギを手に入れようとして失敗した後、所長を射殺した。労働局長の射殺は勤務時間中に職場の中で行われた。後任者の射殺は路上で行われた。3月15日には3人目の労働局長が埋葬された。葬送の突撃隊の音楽隊には手榴弾がなげつけられ、15人が負傷した、などと⁴⁷。ワルシャワとその周辺部は「強盗団汚染地域」とされたことを報告し、最後に総括的に、ワルシャワの民政当局は、「まったく事態に対処できていない」とまとめている⁴⁸。

ヒムラーは、43年2月、以前のゲットー内のDzielna監獄を強制収容

⁴⁷ Bericht über Warschau. Erfahrungen und Erkenntnisse einer Reichsdeutschen in Warschau in cirka 8 Monaten, S.1, in: BA, NS 19/1740.

⁴⁸ Ibid., S.2.

所に転換して⁴⁹、そこにワルシャワで生活しているすべてのユダヤ人を移送することを命じた。民間経営でユダヤ人が働くことは禁止となった。ワルシャワ・ゲットー内にあった民間経営は強制収容所の中(国営施設)に移すものとした。さらにワルシャワの全強制収容所は、その経営と囚人とともに可及的速やかにルブリンとその周辺に移さなければならない、ただし、生産が阻害されないようにして、と⁵⁰。また、監獄を転換した収容所に市内の全ユダヤ人を集めた後は、「治安上の諸理由のため」、ゲットーを解体してしまうことを命じた。その際、家や建築素材などで利用可能なものはなんであれ、前もってより分けておくべきものとした。ゲットーの解体と強制収容所へのユダヤ人の集中は、「そうしなければワルシャワを決して平穩にできないからであり、ゲットーがそのままだと犯罪集団を根絶できないから」であった。「50万人の下等人種のためにこれまであった住宅空間は、決してドイツ人には適していなかったものであり、地上から消し去られなければならない、つねに退廃と蜂起の中心地となる百万都市ワルシャワは、縮小されなければならない」と⁵¹。すでに7月中旬には、ワルシャワ・ゲットー内に設立された強制収容所に「最初の300人の囚人」が送り込まれた⁵²。

東部戦線・対ソ前線への輸送の大動脈が走る総督府ポーランドにおいて、鉄道に対する「強盗団」の襲撃も頻発していた。鉄道省次官ガンツェンミュラーは43年1月の書簡で鉄道襲撃事件をヒムラーに伝え、それに対しヒムラーは、「本来的な強盗団の他に、鉄道に対する特別のサボ

⁴⁹ Schreiben Himmlers an Pohl, den Chef des SS-Wirtschafts-Verwaltungshauptamtes und an den Chef der Sicherheitspolizei und des SD vom 11. 2. 1943, in: BA, NS 19/1740.

⁵⁰ Schreiben Himmlers an Pohl vom 16. Febr. 1943, in: BA, NS 19/1740.

⁵¹ Schreiben Himmlers an den Höheren SS- und Polizeiführer Ost, SS-Obergruppenführer Krüger, Krakau, vom 16. Febr. 1943, in: BA 19/1740. 一年後、ワルシャワ・ゲットーの解体が進んでいることを、ヒムラーは「よし」とした。Schreiben an Pohl vom 22. Febr. 1944, in: BA 19/1740.

⁵² Schreiben Pohl's an Himmler vom 23. Juli 1943. Betr.: Errichtung eines KL im ehemaligen Ghetto in Warschau. Bezug: Befehl vom 11. 6. 33, in: BA, NS 19/1740. ゲットー解体・撤去作業はこの後ずっと続けられ、その時々には報告書が提出されているが、44年6月、ソ連軍の進撃がまじかに迫り、担当者が「移転」せざるを得なくなり、停止のやむなきに至った。Fernschreiben vom 29. 7. 1944, in: Ibid.

永岑 ユダヤ人移住（疎開）と特別処理—ヴァンゼー会議から1942年末まで—
ゾンダーペンデルンダ

タージュ組織が存在する兆候が濃密になっている」⁵³と確認した。ヒムラーによれば、「総督府、ビアウストク、ロシア地域の治安平定の前提は、強盗団支援者・強盗団と疑わしいものすべてを疎開させることである」と。そして、それに当てはまるのは、「まず第一に、ユダヤ人の疎開である」と。しかも、総督府、ビアウストク、ロシア地域のユダヤ人「疎開」だけでなく、「西方からのユダヤ人疎開も」そうである。「というのは、この地域でも同様に襲撃の増加を考慮しなければならないからである」とした⁵⁴。そしてヒムラーは、ガンツェンミュラーに「あなたの助けと支援が必要」と訴え、「鉄道にとっていかに状況が厳しいかは非常によく承知」しているが、「にもかかわらず、援助を、そしてもっとたくさんの列車を」と申し出た⁵⁵。

こうした情勢下、ワルシャワ・ゲッターのユダヤ人たちの蜂起の機運は熟し、1943年4月、反乱がおきた。予期しない蜂起の鎮圧に親衛隊・警察機構は大々的な部隊を投入した。そして、4月19日から5月16日までの鎮圧作戦で、大きな犠牲を払ってではあるが、ゲッターの解体・撤去を遂行した⁵⁶。

ゲッターの解体・撤去、ゲッター内のユダヤ人の強制収容所への集中、そこでの軍需経済のための労働配置、この労働配置には不必要なユダヤ人の「東方への疎開」は、他の地域でも実行された。バルト三国と白ロシアをドイツ占領下で統合したオストラントに関する1943年6月のヒムラー命令は、1. オストラント地域でゲッターにまだ残っているすべてのユダヤ人を強制収容所に集中すること、2. ユダヤ人を強制収容所外の仕事に就けることを43年8月1日から禁止すること、3. リガの近くに強制収容所を設立し、そこに国防軍から出されていたすべての衣類製

⁵³ Schreiben Himmlers an Ganzenmüller vom 20. Jan. 1943, in: BA, NS 19/2774.

⁵⁴ Ibid.

⁵⁵ Ibid. すでに1941年の9月から10月には、対ソ電撃戦の挫折により、ユダヤ人やジブシーの東方への一時的臨時的疎開でさえも、極めて困難、ないし不可能になっていた。拙著(2003)参照。その主要なドキュメントは、BA, NS 19/2655, 71 Bl.

⁵⁶ Schreiben Krügers an Himmler. Betr.: Abschlußbericht Warschauer Ghetto-Aktion, in: BA, NS19/1740.

造・軍需品製造を移すこと、すべての民間経営を排除すること、経営を純粋な強制収容所経営とすること、この組織替えによって国防軍用製造にいかなる後退も生じさせないこと、4. 男子ユダヤ人のできるだけ多くを、オイルシェール（油母頁岩）の採掘のため、オイルシェール地域の強制収容所に移すこと、5. ユダヤ人ゲッターの不必要なメンバーは「東方へ疎開させる」こと、6. 強制収容所の編制替えは、43年8月1日までに終わること、以上を命令した⁵⁷。

おわりに

総督府における「疎開」が、基本的には42年のうちに終わったこと、43年は残っているごくわずかのユダヤ人をゲッター内から市内の強制収容所に移して、必要不可欠な労働配置につけたことがわかる。その後は、むしろ、ドイツ占領当局が次第に苦しい状況に追いやられていくこと、そうした段階を経て、最後の44年夏のポーランド人によるワルシャワ蜂起が起きたことがわかるが⁵⁸、その過程自体の詳しい検討は、別の機会を待たなければならない。

付記：本稿は、科研費基盤研究(A)「軍拡・軍縮と武器移転の総合的歴史研究」（研究代表者・横井勝彦・明治大学教授）の研究成果⁵⁹の一部である。

⁵⁷ Schreiben Himmlers an den Höheren SS- und Polizeiführer Ostland und den Chef des SS-Wirtschafts-Verwaltungshauptamtes vom 21. Juni 1943, in: BA, NS19/1740.

⁵⁸ Fernschreiben des Generalgouverneurs an den Reichsminister Dr. Lammers, Berlin, Reichskanzlei, vom 3. August 1944, in: BA 19/1740.

⁵⁹ 拙稿「ホロコーストの力学と原爆開発」横井勝彦・小野塚知二編『軍拡と武器移転の世界史』日本経済評論社、2012年も、この科研費の研究成果の一部である。

史料①

V. DIE EVAKUIERUNG DER JUDEN

Die Evakuierung der Juden löste, wenigstens im Reichsgebiet, die Auswanderung der Juden ab. Sie wurde seit dem Verbot der jüdischen Auswanderung ab Herbst 1941 in großem Stile vorbereitet und im Jahre 1942 im gesamten Reichsgebiet weitgehend durchgeführt. In der Bilanz des Judentums erscheint sie als "Abwanderung".

Bis 1.1.1943 wanderten nach den Zusammenstellungen des Reichssicherheitshauptamtes ab:

aus dem Altreich mit Sudetenland	100 516 Juden
aus der Ostmark	47 555 "
aus dem Protektorat	69 677 "
Zusammen	<u>217 748 Juden</u>

In diesen Zahlen sind auch die ins Altersghetto Theresienstadt evakuierten Juden enthalten.

Die gesamten Evakuierungen ergaben im Reichsgebiet einschl. Ostgebieten und darüber hinaus im deutschen Macht- und Einflußbereich in Europa von Oktober 1939 oder später bis zum 31.12.1942 folgende Zahlen:

1. Evakuierung von Juden aus Baden und der Pfalz nach Frankreich..... 6 504 Juden
2. Evakuierung von Juden aus dem Reichsgebiet einschl. Protektorat und Bezirk Bialystok nach Osten..... 170 642 "
3. Evakuierung von Juden aus dem Reichsgebiet und dem Protektorat nach Theresienstadt..... 87 193 "
4. Transportierung von Juden aus den Ostprovinzen nach dem russischen Osten:1 449 692 "
 - Es wurden durchgeschleust durch die Lager im Generalgouvernement..... 1 274 166 Juden
 - durch die Lager im Warthegau..... 145 301 "
5. Evakuierung von Juden aus anderen Ländern, nämlich:
 - Frankreich (soweit vor dem 10.11.1942 besetzt)..... 41 911 Juden
 - Niederlande..... 38 571 "
 - Belgien..... 16 886 "
 - Norwegen..... 532 "

-10-

Slowakei.....	56 691 Juden
Kroatien.....	4 927 "
<hr/>	
<u>Evakuierungen insgesamt (einschl.</u>	
<u>Theresienstadt und einschl.</u>	
<u>Sonderbehandlung).....</u>	<u>1 873 549 Juden</u>
ohne Theresienstadt.....	1 786 356 "

6. Dazu kommt noch nach den Angaben des Reichssicherheitshauptamtes die Evakuierung von..... 633 300 Juden in den russischen Gebieten einschl. der früheren baltischen Länder seit Beginn des Ostfeldzuges.

In den obigen Zahlen sind nicht enthalten die Insassen der Ghettos und der Konzentrationslager. Die Evakuierungen aus der Slowakei und aus Kroatien wurden von diesen Staaten selbst in Angriff genommen.

VI. DIE JUDEN IN DEN GHETTOS

Es sind hier zu nennen:

1. Das Altersghetto Theresienstadt, dem insgesamt zugeführt wurden:
- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| | 87 193 Juden, |
| davon aus dem Reichsgebiet | 47 471 (Ostmark 14 222) |
| " " " Protektorat | 39 722. |

Es zählt zu Beginn des Jahres 1943 insgesamt an jüdischen Insassen:

	<u>49 392</u>
davon mit deutsch.Staatsangehörigk.	24 313
Protektoratsangehörigkeit	25 079.

Die Verminderung trat vor allem durch Sterbefälle ein. Außer Theresienstadt gibt es im Reichsgebiet eine Anzahl von jüdischen Alters- und Siechenheimen mit kleinerem Fassungsvermögen, die aber weder als Ghettos noch als Evakuierungsorte angesehen werden.

史料②

Geheime Reichssache

DIE ENDLÖSUNG DER EUROPÄISCHEN JUDENFRAGE

Statistischer Bericht

Notwendige Vorbemerkung. Judenstatistiken sind immer mit Vorbehalt aufzunehmen, da bei der zahlenmäßigen Erfassung des Judentums stets mit besonderen Fehlern zu rechnen ist. Fehlerquellen liegen u. a. in Wesen und Entwicklung des Judentums, seiner Abgrenzung, seiner mehrtausendjährigen ruhelosen Wanderschaft, den zahllosen Aufnahmen und Austritten, den Angleichungsbestrebungen, der Vermischung mit den Wirtsvölkern, vor allem aber im Bemühen des Juden, sich der Erfassung zu entziehen.

Schließlich hat die Statistik teils als Notbehelf, teils wegen der weitgehenden Übereinstimmung zwischen jüdischer Rasse und jüdischem Glauben, teils im konfessionellen Denken des letzten Jahrhunderts befangen, bis zuletzt die Juden nicht nach ihrer Rasse, sondern nach ihrem religiösen Bekenntnis erfaßt. Die Erfassung der Juden nach der Rasse gestaltet sich auch -vor allem durch die äußerliche Verkleinerung des Judentums infolge Austritt, Übertritt, weiter zurückliegender rassischer Vermischung und durch Tarnung- sehr schwierig, wie die mißlungene Erfassung der Rassejuden in Österreich 1923 und die Erhebung der Voll-, Halb- und Vierteljuden bei der deutschen Volkszählung 1939 zeigen. Jüdische Bestandszahlen sind im allgemeinen nur als Mindestzahlen zu werten, wobei der Fehler mit geringerem jüdischem Blutanteil immer größer wird.

Fast unüberwindliche Schwierigkeiten bereitet die Erstellung einer einigermaßen zuverlässigen Statistik über Bestand und Bewegung des Judentums in den gesamten Ostgebieten seit Beginn des zweiten Weltkrieges, der unkontrollierbare Massen von Juden in Bewegung gebracht hat.

-2-

BILANZ DES JUDENFUMS

W e l t . Die Gesamtzahl der Juden auf der Erde schätzte man im letzten Jahrzehnt auf 15 bis 18 Millionen, zuweilen auch auf weit über 20 Millionen. Das Statistische Reichsamt gab für das Jahr 1937 die Zahl mit 17 Millionen an.

E u r o p a . Davon leben um 1937 etwa 10,3 Millionen(60vH in Europa und 5,1 Millionen(30 vH) in Amerika. Um 1880 hatt der europäische Anteil noch 88 vH, der amerikanische erst gut 3 vH betragen.

In Europa häufen bzw. häuften sich die Juden vor allem in den nunmehr von Deutschland besetzten früheren polnisch-russischen und baltischen Gebieten zwischen Ostsee und Finnischem Meerbusen und dem Schwarzen und Asowschen Meer, daneben in den Handelsmittelpunkten Mittel- und Westeuropas im Rheingebiet und an den Küsten des Mittelmeers.

D e u t s c h l a n d . Die Judenbilanz des Reiches ist an die verschieden großen Zeiträume seit der jeweiligen Machtübernahme in seinen Teilgebieten gebunden. Erst von diesen Zeitpunkten an beginnt das Abfluten der Juden in großem Stil. Vorher gab es in manchen Gebieten sogar eine Zunahme der Juden als Folge des Abflusses aus Gebieten, die zum Reiche kamen.

Zur Zeit der jeweiligen Machtübernahme und am 31.12.1942 betrug die Zahl der Juden in

<u>Gebiet</u>	<u>Zeitpunkt der Machtübernahme</u>	<u>Z a h l d e r J u d e n vor der Machtübernahme</u>	<u>am 31.12.1942</u>
Altreich	30.1.1933	561 000	} 51 327
Sudetenland	29.9.1938	30 000	
Ostmark	13.3.1938	220 000	8 102
Böhmen und Mähren	16.3.1939	118 000	15 550
Ostgebiete (mit Bialystok)	Sept.1939 (Juni 1940)	790 000	233 210
Generalgouv. (mit Lemberg)	Sept.1939 (Juni 1940)	2 000 000	297 914
<u>Z u s a m m e n</u>	-	<u>3 719 000</u>	<u>606 103</u>

-3-

Zu den Zahlen vor der jeweiligen Machtübernahme ist ergänzend zu bemerken, daß sie z.T. ineinanderfließen. So strömte der Großteil der 30 000 Juden des Sudetenlandes (27 000 Glaubensjuden) vor der Vereinigung mit dem Reich ohne Überschreitung einer Staatsgrenze und ohne Vermögensverluste rasch ins Protektorat ab, ist also in den Zahlen für Böhmen und Mähren von 1939 zu einem Teil wieder enthalten. Das Sudetenland zählte am 17.5.1939 nur mehr 2 649 Juden.

Für die Zeit kurz vor dem zweiten Weltkrieg läßt sich die Zahl der Juden im Reichsgebiet mit Protektorat und Generalgouvernement für einen festen Zeitpunkt angeben bzw. abschätzen. Sie beträgt um den 17.5.1939 in

		Zum Vergleich: am 31.12.1942
Altreich	233 973	} 51 327
Sudetenland	2 649	
Ostmark	94 270	8 102
Böhmen und Mähren	110 000	15 550
Ostgebiete	rd. 790 000	233 210
Generalgouv.	rd. 2 000 000	297 914
<u>Zusammen</u>	<u>3 120 892</u>	<u>606 103</u>

Altreich und Ostmark hatten bis zum Kriege weit über die Hälfte ihres -zivilisierten und sterilen- Judenbestandes bereits abgegeben, vor allem durch Auswanderung, während im Osten der Zusammenbruch der für die Zukunft gefährlichen fruchtbaren Judenmassen überwiegend erst im Kriege und besonders seit den Evakuierungsmaßnahmen von 1942 deutlich wird.

Das Judentum hat sich damit von 1933 bis 1943 innerhalb des erweiterten Reichsgebietes, also im zeitlich-räumlichen Bereich der nationalsozialistischen Staatsführung, um rund 3,1 Millionen Köpfe vermindert. Im Altreich sank der Bestand auf fast 1/12, in der Ostmark gar auf 1/27, im Generalgouvernement und in Böhmen und Mähren auf etwa 1/7, in den Ostgebieten auf 1/3 bis 1/4.

-4-

Auswanderung, Sterbeüberschuß und Evakuierung. Dieser Rückgang ist das Ergebnis des Zusammenwirkens von Auswanderung, Sterbeüberschuß und Evakuierung, wozu noch geringfügige sonstige Veränderungen kommen (z.B. genehmigte Austritte, Anerkennung als Mischling I. Grades, Neuerfassung, Karteibereinigung), worüber die folgende Tabelle Aufschluß gibt:

Gebiet	Zeitraum von bis 31. 12.1942	A b n a h m e (-) oder Zunahme der Juden durch				Insgesamt
		Auswan- derung	Sterbe- über- schuß	Evaku- ierung	Sonst. Verän- derg.	
Altreich (mit Sude- tenland)	30.1.33 (29.9.38)	-382 534	-61 193	- 100 516	+4 570	- 539 673
Ostmark	13.3.38	-149 124	-14 509	- 47 555	- 710	- 211 898
Böhmen und Mähren	16.3.39	- 25 699	- 7 074	- 69 677	-	- 102 450
Ostgebiete (mit Bialy- stok)	Sept.39 (Juni 40)	- 334 673		- 222 117	-	- 556 790
Generalgouv. (mit Lemberg)	Sept.39 (Juni 40)	- 427 920		-1 274 166	-	-1 702 086
<u>Z u s a m m e n</u>		<u>-1 402 726</u>		<u>-1 714 031</u>	<u>+3 860</u>	<u>-3 112 897</u>

Die Bilanz für Altreich, Ostmark und Böhmen und Mähren zusammen sieht folgendermaßen aus:

Anfangsbestand der Juden bei jeweil.Machtübernahme:	<u>929 000</u>
Veränderungen durch:	
Auswanderung	- 557 357
Sterbeüberschuß	- 82 776
Evakuierung	- 217 748
Neuerfassung usw.	+ 3 860
	<u>- 854 021</u>
Bestand am 31.12.1942:	<u>74 979</u>

Der außerordentliche Sterbeüberschuß der Juden z.B. im Altreich ist infolge der anormalen Überalterung und Lebensschwäche des Judentums ebenso auf Geburtenarmut wie auf hohe Sterblichkeit zurückzuführen: im 1.Viertel 1943 zählte man 22 Geburten, 1 113 Sterbefälle. Die Zahlen über Auswanderung und Sterbeüberschuß(Kriegswirren!) der Ostgebiete und des Generalgouvernements sind nicht nachprüfbar. Sie sind das berechnete

-5-

Ergebnis aus Anfangs- und Endbestand und Evakuierungen der Juden.

Vom 1.1.1943 bis 31.3.1943 fand aus dem Reichsgebiet mit Böhmen und Mähren, neuen Ostgebieten und Bezirk Bialystok wieder die Evakuierung von 113 015 Juden nach dem Osten statt, ebenso die Wohnsitzverlegung von 8 025 Juden ins Altersghetto Theresienstadt. Die Judenzahl in Deutschland, namentlich in den Ostgebieten, wurde dadurch neuerdings stark herabgesetzt.

Mischehen. Die Zahl der Juden im Reichsgebiet von 1939 ent hält am 31.12.1942 einen nicht geringen Teil von Juden in Mischehen:

	Juden am 31.12.42	davon in Mischehe	Rest
Altreich	51 327	16 760	34 567
Ostmark	8 102	4 803	3 299
Böhmen und Mähren	15 550	6 211	9 339
<u>Zusammen</u>	<u>74 979</u>	<u>27 774</u>	<u>47 205</u>

Die Judenzahl des Altreichs hat sich inzwischen weiter von 51 327 am 31.12.1942 auf 31 910 am 1.4.1943 vermindert. Unter diesen 31 910 Juden leben über die Hälfte, nämlich 16 668 in Mischehe, davon 12 117 in privilegierter und 4 551 in nicht privilegierter Mischehe. Außerdem dürfte in der Aufstellung noch eine größere Anzahl von Juden mitgezählt sein, die schließlich als unauffindbar abgeschrieben werden müssen, wie es auch bei jedem Einwohnerkataster immer wieder vorkommt. Der Bestand der Juden im alten Reichsgebiet(ohne Ostgebiete) nähert sich seinem Ende.

Arbeitseinsatz. Von den im Reichsgebiet lebenden Juden befanden sich zu Beginn des Jahres 1943

21 659 in kriegswichtigem Arbeitseinsatz.

Dazu kommen in kriegswichtigem Arbeitseinsatz 18 435 sowjet. russische Juden im Inspekteur-Bereich Königsberg, 50 570 staatenlose und ausländische Juden im Lagereinsatz Schmelz (Breslau) und 95 112 ehem. polnische Juden im Ghetto- und Lagereinsatz im Inspekteur-Bereich Posen.

-6-

Konzentrationslager. In Konzentrationslagern befanden sich am 31.12.1942 insgesamt 9 127 Juden, in Justizvollzugsanstalten 458 Juden. Die Belegstärke der Konzentrationslager mit Juden war folgende:

		Mauthausen/Gusen	79
Lublin	7 342	Sachsenhausen	46
Auschwitz	1 412	Stutthof	18
Buchenwald	227	Ravensbrück	3.

Altersghetto. Im einzigen Altersghetto Theresienstadt gab es Anfang 1943 zusammen 49 392 Juden, die von den Bestandszahlen abgeschrieben sind.

Evakuierung aus anderen europäischen Ländern. Im deutschen Macht- und Einflußbereich außerhalb der Reichsgrenzen fanden folgende Evakuierungen von Juden statt:

<u>Länder</u>	<u>bis 31.12.42</u>	<u>im 1. Vierteljahr 1943</u>
Frankreich (soweit vor dem 10.11.42 besetzt)	41 911	7 995
Niederlande	38 571	13 832
Belgien	16 886	1 616
Norwegen	532	158
Griechenland	-	13 435
Slowakei	56 691	854
Kroatien	4 927	-
Bulgarien	-	11 364
Außerdem in den russischen Gebieten einschl. der früheren baltischen Länder seit Beginn des Ostfeldzuges	633 300	-
<u>Zusammen</u>	<u>792 818</u>	<u>49 254</u>

Europäische Judenbilanz. Die Verminderung des Judentums in Europa dürfte damit bereits an 4 Millionen Köpfe betragen. Höhere Judenbestände zählen auf dem europ. Kontinent (neben Rußland mit etwa 4 Mill.) nur noch Ungarn (750 000) und Rumänien (302 000), vielleicht noch Frankreich. Berücksichtigt man neben dem angeführten Rückgang die jüdische Auswanderung und den jüdischen Sterbeüberschuß

-7-

in den außerdeutschen Staaten Mittel- und Westeuropas, aber auch die unbedingt vorkommenden Doppelzählungen infolge der jüdischen Fluktuation, dann dürfte die Verminderung des Judentums in Europa von 1937 bis Anfang 1943 auf 4 1/2 Millionen zu schätzen sein. Dabei konnte von den Todesfällen der sowjet-russischen Juden in den besetzten Ostgebieten nur ein Teil erfaßt werden, während diejenigen im übrigen europäischen Rußland und an der Front überhaupt nicht enthalten sind. Dazu kommen die Wanderungsströme der Juden innerhalb Rußlands in den asiatischen Bereich hinüber. Auch der Wanderungsstrom der Juden aus den europäischen Ländern außerhalb des deutschen Einflußbereichs nach Übersee ist eine weitgehend unbekannte Größe.

Insgesamt dürfte das europäische Judentum seit 1933, also im ersten Jahrzehnt der nationalsozialistischen Machterfassung, bald die Hälfte seines Bestandes verloren haben. Davon ist wieder nur etwa die Hälfte, also ein Viertel des europäischen Gesamtbestandes von 1937, den anderen Erdteilen zugeflossen.
